# ブロウクン＝ハート

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブロウクン＝ハート

【Ｎコード】

Ｎ０２６８Ｚ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

失恋によりその心に深い傷を負った慎吾。だが彼の横には親友の博次がいてくれて。男の友情ものです。

# 第一章

ブロウクン＝ハート

「まだか」
「ああ、ちょっとな」
池山慎吾は。暗い顔で親友の田中博次の言葉に応える。
「今はいい」
「もう結構経つけれどな」
博次はその慎吾を見て言う。慎吾は黒い髪を短く刈り強い光を放つ目をしている。顔付きは前を向いている感じで何処か歯を食いしばっている。鼻も細くやや高い。
身体つきは精悍でだ。背も高めだ。その彼を太めで丸眼鏡に七三分けの博次が声をかけているのはいささかアンバランスな組み合わせと言えた。
だが博次はそれでもだ。慎吾に言うのだった。
「あれからな」
「そうだよな。もうな」
「半年か？」
「それ位になるな」
こうだ。慎吾はその顔を苦々しいものにさせて言った。
「振られてからな」
「まあ何ていうかな」
「よくある話だよな」
慎吾は今度は眉を顰めさせて言う。
「男が女に振られるっていうのはな」
「まあそれは」
「よくあることさ」
また言う彼だった。
「けれどな」

「あれはな」
「あんなに騒がれて泣かれてな」
告白した途端にだ。彼は相手にそうされたのだ。
「それで学校中に広まってな」
「随分言われたよな」
「今でも言われてるさ」
慎吾の苦々しい言葉が続く。
「不良は駄目だってな」
「不良っていってもな」
見れば慎吾の格好は普通のブレザーだ。黒いブレザーにグレーのズボン、何処にでもあるような学校の制服だ。左胸に校章がある。ネクタイはえんじ色でブラウスはライトブルーだ。
その制服をラフに着崩している。それだけだ。だがそれでもだった。
「俺は煙草もやらねえし喧嘩だってな」
「自分からは絶対にしないよな」
「万引きもいじめもな」
そうした曲がったことはだ。絶対にしない彼だった。
しかしだ。その相手は。
「不良は嫌かよ」
「それでだったね」
「へっ、今までつるんでた奴等も縁切ってくれてよ」
そうなったのだ。彼が振られ学校中にそのことが広まり笑いものになったのを見てだ。それまで仲間だと思っていた連中もだったのだ。
「お蔭でな。今じゃ」
「何ていうか」
「悪いな、博次」
こうだ。彼は博次に礼と謝罪の言葉を告げた。
「そんな俺にずっとな」

「だってさ」
見れば博次の制服は慎吾と全く同じものだ。違いは彼の方が行儀よく着こなしていること位だ。彼は慎吾の隣にいてだ。そのうえで彼と話しているのだ。横に並べば身長も同じ位だ。
「幼稚園の頃からずっとじゃない」
「高校までな」
「一緒でさ。だから」
「友達だってのか」
「そうだよ」
だからだとだ。彼は慎吾に言うのだ。
「友達だから」
「いてくれるんだな。今の俺と一緒に」
「慎吾は何も悪くないよ」
彼から見ればだ。まさにそうだった。
「あんなに騒いだあの娘とそれを見て囃し立て君を笑う連中の方がね」
「悪いって言ってくれるんだな」
「実際そうだから」
その考えをだ。彼に話すのである。
「だから慎吾は全然ね」
「そう言ってくれることが嬉しいんだよ」
慎吾は俯いて。そのうえで博次に言った。

# 第二章

「俺、今御前がいないとな」
「うん」
「もうどうしようもなくなってた」
精神的ダメージ故にだ。彼はそこまで打ちのめされ追い詰められていた。この半年の間。
「俺は壊れてたな」
「酷いからね、今も」
「正直辛いさ」
これはだ。慎吾自身も言う。
「死にたいっても思った」
「今も？」
「いつも誰かにあのことを言われるかって思って」
それでだというのだ。さらに。
「それで言われて。へこんでな」
「誰かに言われて」
「同じ中学の奴等にも言われてるんだぜ」
彼にとってはこのこともだ。辛いことだった。
「他の高校に行ってる奴等にもな」
「そうみたいだね。それは」
「こうした話は広まるんだよ」
博次が言ったことではないのはわかっていた。彼はそうした人間でないことは慎吾が一番よくわかっていた。それは何故か。親友だからだ。
「どうしてもな」
「広まってそうして」
「学校の奴等は皆言ってるさ」
そしてさらにだった。

「思ってるさ。心の中でな」
「あのことをどうか」
「俺を笑いものにして。馬鹿にしてな」
このことがだ。何よりも辛かったのだ。
「だからどいつもこいつも俺に言って」
「それで笑いものにして」
「そうしてるんだよ。いつもな」
「この半年の間ずっとそうだね」
「ああ、そんな中で御前、俺の傍にいてくれてるよな」
博次を見て。そして出した言葉だった。
「親友だからか。今の俺にそうしてくれるのは」
「慎吾さ」
彼はどうなのかとだ。ここで博次は言った。
「小学生の頃だけれど」
「小学生の頃？ガキの頃かよ」
「僕がいじめられてたらいつも助けてくれたよね」
「俺はそういうの嫌いだからな」
だからだとだ。慎吾は答えた。
「だからな」
「同じだよ。僕もね」
「御前も？」
「そういうの嫌いだから」
こう言うのだった。彼も慎吾に対して。
「友達に何かあってそれで見捨てるのって」
「だからなんだな」
「慎吾は慎吾だよ」
博次はこうも言った。俯きながらも。
「安心していいよ。皆が皆思ってることじゃないから」
「御前は違うんだな」
「違うよ。あの中で慎吾だけが僕を守ってくれたのと同じで」

それとだ。同じだというのだ。
「だから僕もね」
「そうか」
慎吾はここまで聞いてだ。その声にだ。
涙を宿らせて。そうして言った。
「悪いな」
「一人だとさ。辛くて耐えられないことでも」
どうかとだ。博次はこうしたことも話した。
「二人だと。違うよ。あの時だって」
「そのガキの頃だよな」
「うん。僕を庇って。慎吾だって大分やられたよね」
そのことをだ。博次は言うのだ。
「けれどそれでも」
「俺がいてくれたってか」
「そのことが。凄く嬉しかったから」
それでだというのだ。
「だからいるよ」
「俺の隣に」
「そうするよ」
こうだ。慎吾に対して言ったのである。
そうした話をしながらだ。二人は共にいた。そしてだ。
慎吾はだ。ずっと言われ続けていたのだった。

# 第三章

本人のいない場所でもいる場所でもだ。彼は言われていた。
「来たよ、振られた奴が」
「あいつ今度は誰に告白するんだろうな」
「女たらしだって？」
「軽蔑するわね」
「ええ、本当にね」
「不良だし馬鹿だし」
「もう最低」
男女共にだ。馬鹿にした笑みで見つつだ。口を歪めてひそひそと話す。時にはわざと聞こえるようにして言う。しかしだった。
博次はその彼の傍にずっといた。クラスは違うがだ。
それでもだ。彼の傍にい続けていた。
昼の弁当を食べる時も休み時も登下校もだ。常に一緒だった。そんな彼にもだ。
周囲はだ。嘲笑いつつこう言うのだった。
「ひょっとしてホモじゃねえのか？」
「だよな。あいつ男にも手を出したのかよ」
「本当にどうしようもない奴だよな」
「それに乗る方も乗る方だよ」
「そうよね」
「不良とデブのボーイズラブなんてどうなのよ」
「洒落になってないわよ」
こうした言葉にだ。慎吾は。
流石に怒りを抑えられず向かいそうになる。しかしだ。
博次はだ。その都度彼に対してだった。こう言うのだった。
「気にしたら駄目だよ」
「けれどよ。御前のことだってよ」

「僕のことはいいから」
こうだ。慎吾に対して言うのである。
「それはね」
「いいっていうのかよ」
「うん、いいよ」
また言う博次だった。
「だから。ここは」
「気にするなってのかよ」
「そうだよ。抑えて」
優しい声でだ。慎吾にまた言った。
「切れたら本当に負けだから」
「そうか」
こう言われてだ。それでだった。
慎吾は抑えるのだった。そうしていた。
そんな日々が続いていた。そんなある日のことだ。
慎吾はその日の最後の授業終わると博次のクラスに向かった。一緒に下校する為にだ。
夕陽が校内を赤く照らしはじめていた。その中でだ。
彼はそこに向かう。そうしてクラスの中に入ろうとすると。
ここでだ。声が聞こえてきた。その声は。
「ねえ田中君」
「何考えてるのよ」
「何であんな奴と一緒にいるのよ」
「池山となんか」
女の声だった。その声の連中は。
慎吾を振ったその当人とその友人連中だ。彼女達がだ。博次に対して言っていたのだ。
それを聞いてだ。慎吾は。
反射的にクラスの扉のところに身を隠してそのうえでクラスの中を覗き込んだ。扉に背をつけてそのうえでだ。覗き込んだのである。

見ればだ。博次に対して実際にだ。彼女達が口々に言っていた。
「あんたまで碌な目に逢わないわよ」
「そう、これは忠告よ」
「わかってるの？」
半ばだ。脅しながらの言葉だった。
自分の席で帰り支度をする彼を半円状に囲みだ。それでだった。
口々に言う。剣幕も凄く。
「あんな不良と一緒にいて何にもならないでしょ」
「下品だし頭も悪いし」
「大体ね。あいつはね」
その振った女の子も言う。
「私なんかと付き合いたいってね」
「身の程知らずよね」
「そうそう」
「不良は不良と一緒にいなさいっての」
「全くね」
「何考えてるのよ」
こう言う彼女達だった。慎吾を馬鹿にすることも忘れない。
そしてだ。さらにだった。
博次に対してだ。さらに迫るのだった。

# 第四章

「あのね。あんたも今あいつ意外に友達いないでしょ」
「あんたも今色々言われてるでしょ」
「それが続くわよ」
「それでもいいの？」
こう言ってだ。慎吾と縁を切るように言っているのだ。それでだ。
その話を聞いてだ。慎吾は。
唇を噛み締めてだ。忌々しい顔で呟いた。
「だよな。俺といてもな」
彼といてもだ。博次にとってはだ。
どうなのか。それで言ったのだった。
「あいつにとっていいことないしな。あいつは何もしていない」
あくまで彼だけの問題だ。だからだというのだ。
それでだ。もうだった。
諦めてだ。その場を去ろうとした。
「それじゃあな」
クラスの入り口から、博次のところからだ。去ろうとした。これからは一人でいようと決めてだ。そのうえでなのだった。
だが、だった。ここでだ。
博次はだ。こう彼女達に言ったのだ。
「言いたいことはそれだけ？」
「えっ、何！？」
「何って！？」
「何だっていうのよ」
「だから。言いたいことはもう終わった？」
まただ。彼女達に言ったのだった。
「じゃあね。僕今から慎吾のところに行くから」
「ちょっと、何言ってるのよ」

「あいつと縁切れって言ってるのに」
「もうあんただけじゃない。あいつと一緒にいるの」
「それで縁切らないっていうの？」
「私達の話聞いたでしょ」
「聞きはしたよ」
それはだというのだ。
「けれど。馬鹿なことを聞いたとも思ってるよ」
「馬鹿！？」
「私達が馬鹿ですって！？」
「そう言うの！？」
「私達を」
「そうだよ。君達は慎吾が不良ってだけで否定して彼を全く見ていないじゃない」
だからだと。彼は言うのだ。
「それで馬鹿って言わないでどう言うのかな」
「あのね、あんな奴ね」
「何処がいいのよ」
「不良で勉強もできなくて」
しかもだというのだ。さらにだ。
「外見だって猿みたいだし」
「いきがってるだけじゃない」
「そんな奴でしょ」
「それで何だってのよ」
「だから。慎吾と話してみてそれでわかったのかな」
彼が言うのはこのことだった。あくまでだ。
そうしてだ。また言うのだった。
「全然話してもないでしょ」
「話すまでもないじゃない」
「そうよ。見ればわかるじゃない」
「そうでしょ」

まだこう言う彼女達だった。しかしだ。
博次はその彼女等にだ。また言ったのだった。
「じゃあね。今から慎吾のところに行くから」
「ちょっと、待ちなさいよ」
「あんたも何言われるかわからないのよ」
「それでもいいの！？」
「覚悟してるんでしょうね」
「言えば？好きなだけね」
平気な顔でだ。また言った彼だった。
「僕は全然気にしないから」
「くっ、何て奴なのよ」
「あんな馬鹿と一緒にいるだけじゃなくて」
「女敵に回して平気でいられると思ってるの？」
「あんただってね」
「そうだね。ちょっとだけ騒がしくなるね」
それだけだと。博次は素っ気無く返す。

# 第五章

「それだけだね」
「わかったわよ。じゃあね」
「あんただってね」
「これから痛い目に見るから」
「好きにすれば？僕にとってはどうでもいいことだから」
ここまで言ってだ。彼女達の間を通り過ぎてだ。慎吾のところに向かう彼だった。
慎吾はここまで見てだ。それでだった。
すぐに教室の扉のところから離れてだ。校門のところに向かったのだった。
そして校門でだ。その博次と会った。
博次はその彼の姿を見てだ。笑顔で言ってきた。
「じゃあ帰ろうか」
「ああ、そうだな」
慎吾は微笑み博次に応えた。
そのうえで二人並んで歩きはじめた。その中でだ。
彼はだ。こう博次に言った。
「俺な」
「慎吾は？」
「最高に幸せな奴だよな」
こう言ったのである。
「そう思うよ」
「幸せって」
「なあ、今日な」
慎吾はさらにだ。博次に対して言った。
「これから飲むか？」
「お酒？」

「ああ、俺の家来いよ」
こうだ。微笑んで言ってだった。
「それでとことんまで飲もうぜ」
「何かあったのかな」
「何もないさ」
お互いにだ。隠して話をする。
「けれど。飲みたくなったんだよ」
「だからなんだね」
「ああ、飲もうぜ」
前を向いて微笑んでだ。博次に話す。
「俺の家でな」
「慎吾の家で？」
「全部俺の驕りだ」
こんなことも言う慎吾だった。
「今回はな」
「いつものワリカンじゃなくて？」
「ああ。今日はそうしたいんだよ」
教室でのことはあえて言わずにだ。博次に感謝してだった。
こう言ってだ。そのうえで。
「つまみもな」
「つまみも」
「酒はビールでいいよな」
慎吾が一番よく飲む酒だ。博次もだ。二人はよく一緒にビールを飲んでそのうえでだ。話をしているのだ。そうしているのである。
だからここでもだ。それでどうかというのだ。
「それとつまみは柿の種とな」
「ピーナツだね」
「そういうのでいいよな。何ならな」
他のものもだ。ここで出すのだった。
「他のつまみも買ってな」

「他のもなんだ」
「今日はとことんまで飲んで食おうぜ」
博次に笑顔を向けて話す。
「そうしようぜ」
「うん、じゃあ今回は」
「完全に俺もちだ」
彼のだ。それだというのだ。
「それでな」
「うん、じゃあね」
こう話してだった。二人でだった。
この日はとことんまで飲んで食べるのだった。それからだ。
慎吾はもう何を言われても動じずだ。博次と共にいた。
そして博次もだ。常に慎吾と共にいるのだった。
その中でだ。二人はやがて。
高校を卒業して大学に入りそして企業を立ち上げだ。一代にして世界に知られる経営者になったのである。そうなってからだ。社長になった慎吾は言った。
「俺が今あるのはな」
「今あるのは？」
「それはですか」
「一体」
「こいつがいるからだよ」
こうだ。副社長である博次を見て言うのである。
「だからここまでできたんだよ」
「副社長がおられてですか」
「それで」
「僕もだよ」
博次もだ。笑顔で話すのだった。その部下達に。
「社長と一緒だからね」
「つまりそれだけ絆が強いんですね」

「御二人は」
「そうなんですね」
「ああ。俺にとっては無二のパートナーだよ」
「子供の頃からね」
お互いに見合ってだ。こんなことも話す二人だった。
「だからこれからもな」
「ずっと一緒だよ」
二人で話してだった。その絆を確かめ合うのだった。高校のことは彼等にとってはほんの一ページだった。だが確かな一ページ、二人の絆として残っているものだった。

ブロウクン＝ハート　　完

２０１１・７・２９

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0268z/

---

ブロウクン＝ハート

2011年12月1日00時49分発行